

台湾留用日本人の足跡を追って（4） 金関丈夫先生の独り言

安溪遊地・安溪貴子

國分直一先生の終生の師であり、池田敏雄さんとともに『民俗臺灣』の編輯人として活躍された金関丈夫（かなせき・たけお）博士が中心となって、光復台湾に留用された日本人学者たちのサロンとしての『回覧雑誌』を作成されたことは、全体の目次と筆名・執筆者のリストとともに、本誌の第66号（2020年新年号）に掲載していただきました。

形質人類学が専門で、日本人の起源についての二重構造説の濫觴となる先駆的な業績をあげた金関先生は、また、歴史家のジョージ・H・カーが「日本のダヴィンチ」と評したほどの、文芸方面の深い造詣に基づいて旺盛な執筆活動をおこないました。

戦前の検閲制度の中での出版の苦勞から開放され、同人が自由に書けるようにと、金関先生は積極的に筆をふるいます。留用者として台湾から出られない、また1947年の228事件のあとは20日間にわたる禁足を強いられた日本人知識人の創作活動を知ることは、コロナ禍で行動が制約される今、どのような創造的な活動で心の空白を埋めるかの、ひとつのヒントともなるでしょう。

金関先生が『回覧雑誌』に書かれた記事は、硬軟取り混ぜ膨大なものですが、ここでは、第1号『花果』（1946年7月9日刊行）所載の「點心」および「ノートから」と第2号『雙魚』（1946年8月25日刊行）の「落穂集」をご紹介します。「點心」は、「林熊生 號金關」の筆名で、ほかは「金関丈夫」の署名で発表されています。

原文の注と振り仮名は、まるかっこに入れ、編注は〔峰人〕などのように示して、インターネットなどでの検索の手がかりになるようにしました。原文は、旧仮名遣いで、旧漢字に略字がまじりますが、ここでは旧漢字に統一してあります。

現在台湾大学図書館に収蔵されている『回覧雑誌』の利用にあたっては、同館特蔵組の林慎孜さんのお世話になりました。所載の金関先生関連のデータの使用については、生前に金関恕先生にご了解をいただいています。

プロフィール

*金関丈夫。大正十二年京都帝國大學醫學部卒業。醫學博士。解剖學、人類學專攻。現在、國立臺灣大學醫學院教授。別號多く、林熊生、山中源二郎、蘇文石、草葉薰、蓬頭兒、金鷄、金關（きんくわん）等。未だある筈なるも調査間に合はず。年齢は五十に近からんも、本人それを云はれるを好まざる氣風あり。すべからく三十代に云ふべし。音聲低く抑揚すくなく、妄りに喜怒の大聲を發せず。但し、その口もとには、曾て甘き言の葉など囁ける痕跡をとゞめ、その未だ全く過去の痕跡に化し居らざるを見るを得べし。——女人にそれを見る能力、有りや無しや。（『花果』編輯子）

點心

○小説一篇、感想集一篇、それに點心一皿までつけると、またしても小生一人舞臺みたいになり、あいつ出しやばりな、と蔭口たゝかれることにならふ。若いものが働かないので、小生の出しやばりでは斷じてない。この位がなんだ。

○小生の文學を輕文學と自稱することにし



『民俗臺灣』編集の池田敏雄氏応召記念。1944年、松山虔三氏撮影。

た。あちらにもライトリテチュアと云ふのがあるさうだが、それはどんなものか、よく知らない。一度矢野〔峰人〕先生にきゝ度いと思つてゐる。小生の輕文學の定義は先づ「輕音樂」のたぐひなり、とでもして置かう。喫茶店で腕に生毛（うぶげ）の生えた少女を眺めながら、ベーターフェンの第五シムフォニーであるまい、と云つて浪花節も困ると云つた場合の輕音樂、まああんなものだらう。

○浪花節に比べられると大衆文學先生はふんがいするかも知れぬが、筋や、人情や、多少の節まはしで賣りつけるところは、似たりよつたりだ。大した違ひはない。林熊生なども大衆小説をちよいちよい書くが、自分でそん

なものだと思つてゐる。大家のだとて大差なしさ。それよりベーターフェンに比べられるやうな、純文學が出来るかどうかゞ問題だ。小生は今のところ、そんなむつかしいものを作らうとは思はない。

○小生老後に若し暇と氣力があつたら、一つだけ一大傳記作品を書き度いと思つてゐる。材料は「袁世凱」だ。ストレッチャー[Lytton Strachey]のやうな筆で、西太后の宮廷から、孫文革命までを書くのだ。中國のアルキーフは小生にそれを許すや否や。これが當れば、英譯されて、小生は成金になる。但しもはや老牀だからそんな金は不要だ。そこで諸君にわけてあげたいのだが、皆小生よりひ弱だから、その頃は生きてゐないだらう。可

哀さうなものだ。

○H [早坂一郎カ] 大先生がゐなくなつたとたん、小生の口吻が、彼の口吻に似てきたやうで、いさゝか悲觀。Hにきかせたら喜ぶだらう。しかしこの代用品は本物よりも本物なのだ。やつぱり悲觀しないことにする。

○舊聞に屬するが、國分 [直一] 先生との最後の旅行は大発見つゞきだつた。先づ竹山の石棺を發見した [本誌64・65号]。これが大発見であることは、當時の人民導報が證明してゐるから間違ひはない。第二にわが松山 [虔三] 先生の頭に嘗て毛髮の繁茂してゐたと云ふ動かすべからざる證據を發見した。その證據物件は、同氏が本誌上に掲載すると云つてゐるから、宜しく就いて見られよ。第三の發見は、わが神聖なる民俗臺灣の投稿家のうちにも、恐しく手の込んだインチキ野郎のゐたのを知つたこと。お蔭で有名な北港の媽祖なるものが、案外けち臭ひものであることを知つた。それも一つの發見であつた。

○近頃は立石 [鐵臣] 先生が一日僕の机の向ふにがん張つてゐるので、氣を許して獨り言 (ごと) を云ふことが出来ない。小生の獨りごとは大てい「馬鹿野郎」はまだいゝ方で「貴様らとつとと斃 (くたば) つちまへ」と云ふやふな敵膽を寒からしめるものが多い。或る時どうした拍子か「お前行儀が悪いな」と云つた。とたんに氣がつくと、同じ部屋にゐた研究生があはてゝ肌を入れてゐた。また或る時「何をさせても頓馬だな」と云つた。福田百合子嬢が、「はつ」と云つて立ち上つたには、こちらが驚いた。今は用心してゐるが、も少ししたらまた始めるかも知れないから、立石先生も用心したまへ。

○但しこんな獨りごとは、元來自分で自分の失策を思ひ出して、自分に向つて罵つてゐる

のだから、誰も氣にする必要はない。小生が用心してゐるのは、そんな弱點を見せまいためであつて、立石先生をいたはつてゐるのではない。

○森於菟先生の獨りごとは「○○なんか死んで仕舞へ」と云ふのださうだ。○○と云ふのは森先生の末子で最愛の子息の名である。すると、こんな野鄙た獨りごとも、小生特有ではなく、やがて獨語 (ドイツゴではない) 大辭典の中に澤山の類例と共に編纂されるべきものであるらしい。しかしこんな辭引きは出来ない方がいゝ。獨り言に紛らして、誰れかをおどかしてやらうなどと云ふ不心得者が出来るかもしれぬから。

○ひとり言の講釋が長くなりすぎた。これと共に困るのは出物はれ物の一種だ。但しこれは餘り毒にならないから、お互ひに遠慮しないことにしよう。同じ釜のめしを食つた仲と云ふのよりも、同じ瓦斯を吸つた仲と云つた方が將來親しみが多いに違ひない。

○話が大ぶ下卑てきた。元來そんな下卑た性質ではなかつたのだが、友達の悪いせみだらう。とにかくこの邊できり上げた方が無事らしい。もつと筆が走ると危いやうな豫感がする。(林熊生 號金關)

ノートより

○「焼刃 (やいば) の匂ひ」

○視覺的なものをなぜ「匂ひ」と呼ぶか。

○この「匂ひ」と呼ばれる、刀の肌の様相は如何なる點で他の視覺的なものと異つてゐるか。

○形の視覺的であることには如何なる條件が伴ふか。

○色の視覺的であることには如何なる條件が

伴ふか。

○「匂ひ」が視覚的であり、然も普通の視覚的である條件を具有しない點は何處にあるか。

○しかし、これを何故「音」とも「味」ともまた「感じ」とも云はないで、「匂ひ」と云つたか。

○匂ひの性質。

○視覚的には非嗅覺的なものに對して「匂ひ」と呼ぶ例。（「紫匂ふ」は草花の事實匂ふことならん。誤るべからず。）

○かゝる「匂ひ」に當る外國語。

○「匂ひ」の構造は民族的であるか否か。

（一九四五、一二、二一）

谷川徹三「文學の周圍」（昭和十一年）の中の「美術批評について」

筆者附記、松の美しさを認め得る眼にとつては、松の美しさは一目でも判る（もつとよく見てもつと美しく感じることは事實だとしても）。畫家はこれを再現し、或はそれ以上の美を表現するために數ヶ月見る必要があるだらう。しかし、後者は單なる「視」ではなくして、「匂」への道程（匂の筋肉のリズムにまで）を含む「視」であり、前者の「視」とは性質を異にするものだ。だから前者が一目見て松を美しいと感じる感じが、畫家の松を一ヶ月見て感じた美感よりも淺いとは云へない。

美術家が素人をやつつける時の論法は、往々にしてこの點をとり違へてゐることがある。畫家諸君。素人が一目見て美を感じ得るこの眼は誰が與へたか。夫れは君たちよりももつと偉い古來の幾多の天才だ。帽子を脱ぎ給へ。

（一九四六、一、一）

○

これからの日本の新聞社は、各自社のラヂ

オ放送をする。現地放送も有力にやる。そのうちに廣告放送（興行、新刊、求人、求職等）を加へて費用をかせぐ。一般聽衆は無料にする。種目は勿論ニウズに力を入れる。翌日の新聞にはそのニウズの正確懇切な解説をのせる。と云ふ行き方がいゝだらう。紙の節約のためにも。

（一九四六、一、一）

○

燕尾服を着た演奏者から「水車小屋の少女」の歌を聽かせて貰ふことは、もう止（よ）しにしよう。自ら水車小屋のほとりをさまよひながら聽くことが出来るではないか。トーキーの魅力。

（一九四六、一、一）

○

日本婦人の貞操の固いことは、日本婦人、または日本の社會のモラルの高いことを表すのではなく、日本婦人に他人をアトラクトするだけの美人の少いせみだらう。だから、どんな女でも美人に見える社會では、日本にも姦通が多い。西洋では恐らく下層より上層に多いだらう。

（一九四六、一、九）

○

「闇夜行路」前半讀了。「性根（しやうね）」が主人公の性根として書かれてゐる。これは恐らく作者の性根であらう。性根のない主人公を書いたものには作者の性根は出ないだらうか。性根として出ないだけでやはり出る。志賀のもそれが「性根」として出てゐるのが問題ではない。性根が出てゐるのが問題だ。描かれた性根に迷はされてはいけない。描れない性根もあるのだ。志賀をよんで感動するときその感動がどこから來るかを知る必要がある。文學的感動だと思つて、別種の感動を受けてゐることがあるかも知れない。

（一九四六、二、七）

「闇夜行路」の主人公の妻が過ちを犯す。

その相手の男と子供の時に「龜と鼈」と云ふ遊びをした話がある。この北國的な變な暗い遊戯は古い傳統と廣い擴りを持つたものであるやうな感じがする。此處へこの話をもつてくると、妻の過ちが何か個人的な過ちでなくて民族の過去からの宿命的な過ちの犠牲であるかのやうな気持ちがする。文學のみのなし得る救ひである。この少年時代の話をもつて来た用意は大したものだ。

(一九四六、二、八)

志賀文學の特色の一つ。「闇夜行路」に表された愛情が大てい皮膚の感覺を通じて表はされる。吉原藝者の手の感觸、加代と云ふ女給の背中の壓迫、直子の手を懷（ふとこ）ろに入れてやるところ、最後の場面でやはり直子に手を握らせるところ。

この人がかんしやくをおこすと、ものを叩きつけられたりするの必然だ。育ちが悪ければ、大いに人をなぐりつける人だらう。

(一九四六、二、八)

○

谷崎潤一郎譯「源氏物語」。

藤壺更衣と源氏との關係が省略されてゐる。主人公の罪障の悩みがなくては源氏文學は骨抜きだ。文學には5%の省略と云ふ數量問題はない。 [日付なし]

○

紫式部は明石の入道を餘りにもまざまざと——それは里見 [弴] に劣らない程だ——描きすぎた。それをぼやかすためにアポロジアを必要としたほど。

サッカリー[William M. Thackeray] (ヴァニティ フェア) は某公爵を餘りにもまざまざと描きすぎた。時人これを攻撃する。「これこそ最も眞に近いのだ。」とサッカリーは見得を切つた。 (一九四五、八、二六)

○

才能を有するものと、才能に對して支拂はんとするものは日本にもある。西洋の仲介者——ジャーナリスト、興行者 (マネージャー)、善行家 (ベニファクター) ——の如きものが日本では活動してゐないのだ。日本に於ける、成功せる才能の氣まぐれさ。

(一九四五、八、二六)

○

源氏物語の作者が、父親としての主人公の得手勝手——自分のことを棚において、息子の好色を誡める——を揶揄してゐる。このところは、どうもモデルを感じさせる。そしてそのモデルは近しい人であり、その人とは、その揶揄が現實に於いても評されるほどの親しい關係に、作者のあることを示す。御堂關白と作者との私の關係。

(一九四五、九、二一)

○

「國文學者一夕話」。それは、現代の日本國文學者總動員の隨筆集だ。ひどくつまらない。中に瀧田貞作君國文學界に天才を吸引せよ、と叫んでゐる。至極適切。

(一九四五、九、二八)

○

芥川や室生 [犀星] の俳句は生 (なま) やさしいものだ。あれは感覺の句だ。芭蕉には叫びがある。少くとも瀧井孝作の「妻よ子よ春日の杜の冬日和」は、文字通り叫んでゐる。

(一九四五、九、二九)

○

ストレッチャー、片岡鐵兵譯「エリザベスとエセックス」。日本では豊富な文獻の保存されてゐるのは明治次後のことであらう。その保存の状態から察するところ、これを完全に利用し得る人物 (かほ) になるには幾十年の

年月が必要であらう。假にさうした難點を解決し得たとして、明治次後に何のロマンスがあらう。戦國時代のロマンスを明治以後の文獻によつて、五十年掛りで書くことは、何人にも不可能だ。日本に一人のストレッチャー、一人のモーロワ[André Maurois]、一人のツワイク[Stefan Zweig]、一人のルドキヒ[Emil Ludwig]の出現しない所以。

(一九四五、一〇、二四)

○

女主人公。

美貌、才能ともにあり (ヴァニティ フェア)

美貌なく才能あり (ヂェーン エアー——著者はこれでも小説は書けると傲語した。)

美貌あり才能なし (テス)

美貌、才能ともになし (秋 [徳] 田秋聲の女?)

美貌、才能問題にならず。(嵐ヶ丘)

もう、その他にテーマはないだらうか。

(一九四五、一〇、二四)

○

源氏物語は宮廷の文學であつたが、宮室の文學ではなかつた。云はゞ藤原氏の文學であつた。宮室の文學——詩歌の文學——こそは日本文學の本流であつて、不滅の傳統をもつものだ、と云ふのは保田與重郎の「後鳥羽院」の説だ。宮室中心の詩歌文學の今日を以つて日本宮室の今日を代辯せしむるなかれ。

(一九四五、一二、一二)

○

芥川龍之介の文學。つなぎ目つなぎ目の「のみならず」がなくては成立しない。くみ立て細工のうぎめにあたるものだ。徳田秋聲の短篇の或るものには、このうぎめはない。凡彫りだからである。たゞ我流の、恐しく妙

な鑿の使ひ方をする人だが。

(一九四五、一二、一八)

○

雑誌「畫說」の座談會記事をよむ。櫟柿軒と云ふ男が、雪舟は「おくり込み」を盛んに用ゐてゐる。雪舟の畫がセザンヌに近いのはそのせみだらう、と云つてゐる。「おくり込み」と云ふのは近景から中景へ、中景から遠景へと、筆を送り込むことで、近景、中景、遠景の間をつなぎ埋めることを意味する。すると雪舟のは離れてゐたものをつないでいつたのである。ところがセザンヌの方は、つながれてゐたものをはなしていつたのである。歩みよりの結果、似たところまできたので、その道程は逆なのだ。雪舟の山水の或るものは、東洋畫としては散文的で、比較的つまらないのはかう云ふ所から來てゐるのだらう。すると、セザンヌは西洋畫としては比較的詩的と云へるだらうか。——この譬喩はちよつといやだが。

(一九四六、五、一)

○

シャーロット ブロンティ [Charlotte Brontë] の老女、狂つて椅子を鋸ひく。鋸の狂氣性。

(一九四六、八、一二)

○

「竹齋」。主人公はやぶ醫師 (くすし)、従者は「にらみの介」。それで、「やぶにらみ」と云ふことになる。されば喧嘩のとき、にらみの介、相手と見誤つて主人の脚をひき倒す。

(一九四五、七、一五)

○

武者小路 [實篤] 「西鶴」。やつと小説らしいものが書け出したと云ふところか。武者ははるかに戯曲家なり。神様や天使の出てくるものは誰にも書けない。(林熊生の神様などはちつとも神様らしくない……)

若い美しい一寸小生意氣な、しかし結局可愛らしい女（天使でもあり、淀君でもあり、「友情」の女でもあり、澤山ある）は、武者の創造物だ。武者文學以後、かう云ふ少女が現実に出現した事実を、史家は見逃してはいけけない。但しよほど出来がよくないと、「結局可愛らしい」と云ふまではゆかない。

（一九四五、六、二六）

○

漱石の「心」を再讀する。「先生」の生活を作者は肯定してかゝる。これが何となくこの作品に素人臭ひ感じを與へる原因だらう。この「先生」の生活を、作者は、一種罪なくて配所の月式の消極的理想郷の如く考へてゐる氣合がある。（一九四五、六、二六）

○

通俗文學作品中の「思想」は、中庸を得た、平凡な——多少時代色ある——ものでいゝ。ちよつぱり、手際よく、色つけ程度に。

例へば、ギトリ[Sacha Guitry]の「ベルランジェー」の「自由」思想、武田麟太郎の「下界の眺め」の「常識」思想。いづれも商品をよく知るものだ。（一九四五、六、一五）

○

シンクレア ルイス（譯本）「アロウスマスの生活」。少しもひねくれた所のない、まぢめにとり組んだものだが、面白いものではない。「藝」の楽しさがない。譯者はこの作の主人公にアメリカを見よと云ふが、作者そのものがそれ以上にアメリカなのだ。

（一九四五、六、一〇）

○

平田禿木「文學會前後」。中に「敕任官の鷗外が」とある。東京人以外の文章に出てこない言葉だ。但し臺灣人の文章には珍しくな

いだらう。（一九四五、三、二六）

○

航空母艦で軍人やえら方（がた）の家族共が内地へ引揚げたと云ふ（臺灣空襲の最中）。これで安心した。その便宜を得られない自分たちは彼等同様の死闘をしなくてもよろしい、と云ひ渡されたも同様だから。

（一九四五、一、一六）

○

新聞紙上に安藤[利吉]總督の就任挨拶を讀む。何の必要あつてこれを最初に宣言しなければならないか。（前總督の方針に對するつらあて以外の意味なし）。この馬鹿男が同時に軍司令官なのだ。この男の下ではいゝ戦争のできる筈はない。犬死はいやだ。

（一九四五、一、一六）

○

森銚三「渡邊華山」。

華山の言葉に、スケッチは生き生きとしてゐるが、繪にすると死んでしまふ、と云ふ意味の嘆きがある。出来上がった繪がほんとの繪なら、そこで死んでしまつたものなどは、死んでしまつてもいいのだ。

（一九四五、一二、八）

落穂集

○

「まどふ」と云ふ言葉。私の國（讃岐）では「補ふ」「辨償する」と云ふ意味で「まどふ」と云ふ言葉を使ふ。他國ではあまり聞かない。慶長四年正月に書かれた黒田如水の茶の湯の「定（さだめ）」（「銀杏の木陰」と云ふ本に收めらる）に、茶の湯 一檜杓汲取候はゞ、又一檜杓差し候て、まどひ置可申候……」とある由である。慶長の頃には一般に使用されてゐたものと見える。「ひしや

く」の「ひ」が「檜」であつたことも、この文獻で私は始めて気づいた。なるほど檜杓に違ひない。

○

「福來病」。玉勝間の下に「福來病」とあるのは、今日の甲状腺腫ではないかと思ふ。

「福來」は「ふくら」即ち「膨ら」の意かと思ふが、福來の字を充てたのに何か意識的或は、無意識的の意味があれば面白い。臺灣でもこの腫物を「福」のつく言葉で呼ぶことがあるやうだが、はつきりしたノートが見當らない。

○

「鼻の挨拶」。康熙六十一年の見聞を誌した「番俗六考」に傀儡番の風習として「鼻の挨拶 (Nasengruß)」の風のあることが見える。國分さんの話では紅頭嶼には今も之れがあるとのことである。アフリカから南方アジア及び汎く太平洋一般に擴つてある世界的風習である。

○

「磨鏡」。何で見たか忘れたが、臺灣では女同志のみたづらを「磨鏡 (マキアン)」と云ふ。なるほど平たいものをすり合はせるわけだ。

○

「鳥踏」。臺灣の民家の側面に一つの構造があり、これを「鳥踏 (チャウタウ)」と云ふ。日本の土藏作りにも同様のものがあり、これを「あまぎり」と云ふことを柳宗悦さんから聞いた。「あまぎり」は「雨切り」であらう。そしてこの構造はおそらく、この名から聯想されるやうな用途をもつてあるものであらう。

○

「はじかみ」。「うちてしやまむ」で有名

になつた神武紀の歌に「くちひゞくはじかみ」の語が見える。うちてしやまんと云ふ亢奮と関係があると思へる。ツオー族は首がりのとき生薑を嚙んで、その亢奮のときに首を切るさうである。

○

女陰を刀傷に譬へること。南方熊楠先生の隨筆に女陰を刀傷にたとへた東西の事例を挙げたものがある。日本では彦山權現誓助太刀の中の毛谷村六助の「長刀 (なきなた) 傷が所望ぢやわ」と云ふ例が引かれてゐる。私もこれに新しい例を一つつけ加へることが出来る。渡邊 [一夫] 氏譯の「ウルガルガンチュワ」にこれがある。佛蘭西の例だ。引用省略。

○

「こんにやく問答」。日本の落語や民話にある「こんにやく問答」の原作は支那にある。朝鮮にも傳はつてゐる。横山又次郎の「珍談百篇」をよむとこれがスコットランドにもあるのだから驚いた。指を三本あげたのが「三位」で、また一本あげたのが「一躰」だと云ふ調子である。

○

蟹と女陰と鼻。私の子供のとき郷里で聞いた民話に、お婆さんが河で洗濯してゐると、いけない蟹が出て来てお婆さんの陰核 (さね) をはさむ。お爺さんがそれを除かふとして顔を近づけると、今度はいま一方の爪でお爺さんの鼻をはさむ。「はなさないか」と云ふと、「はなさね」と云つた。これは醒睡笑だつたか何か古い落語本にもある。或る女房が同じ災厄に遭ひ山伏に祈つて貰ふが、蟹が落ちない。「いで、この上は嚙みくだいて呉れん」と云つて顔を出すと、山伏の鼻がはさまれる。女房は苦しまぎれに小便をする、と

云ふ大騒ぎの話であるが、「はなさね」のシャレはない。これも驚いたことにはフランスに類話がある。原本は忘れたが、夜、蟹を贈られたので、とり敢ず便壺の中に入れ、寢臺の下に置いて寝ると、夜中に蟹がはひ出して妻君の下をはさむ。亭主が騒ぎ出してまた鼻をはさまれると云ふ話である。鼻とさねとの関係は林馬生先生の別講座参照。

○

「滴血認骨」。死骨を選別するとき、血を滴して血縁者の骨を認定する風習の名残りが、臺灣の「拾骨」の時に見られるが、中國では古い文獻に残るのみである。近頃フィオリス夫人の「安南の一族（一四二頁）」を読むと、安南には今もこの風習があるとのことである。漢代の遺風の一つであらう。

○

「尾籠」。ばかなことを「をこ」と云つた。これに「尾籠（をこ）」の字を充てた。これを尾籠（びろう）と音讀したのは恐らく漢學書生の隠語であつたのだらう。今は尾籠（びろう）が普通になり、しかもその由來を知る人は少い。

○

「馬芝居」。少年のころ馬芝居と云ふものを見た。村の小さい金主が農閑期に受けてきて、刈田のあとへ小屋掛けして興行したのだつた。馬芝居と云つても馬が芝居するのではない。すべての役者が馬に乗つて出場するのである。この話を人に話すが、そんなものを見聞したと云ふ人がない。飯塚[友一郎]さんの國劇要覽にもものつてゐない。ところが松崎天民の「人間祕話」に少年のころ（天民明治十一年生れ）美作落合村で、「源之丞と云ふ馬芝居」を見た記事がある。やはり「馬に騎つて演る芝居」だとある。源之丞と云ふの

は人形芝居のはづだから、何かの思ひ違ひだらうと思ふが、馬芝居に関する文獻は私の知るかぎりでは、これ一つである。美作とあるから矢野先生に一度その見聞の有無をおたづねしたいと思つてゐる。

○

「丈六」。關西ではあぐらかく事を「ぢよろかく」と云ふ。その出所が佛の「丈六」であることを「蓮如上人一代聞書」で知つた。岩波文庫の同本一九五頁に、「丈六かゝず」とある。坐佛はたけ丈六が法である。

○

「探出」。何であつたか、支那の小説に「探出」と云ふ言葉があつた。狩野[探道]畫伯の名ではない。幽かなるところを探ると云ふ、閨房のマニプラチオンに関する言葉だつた。

○

槍の繪のエンタシス。嶽父深造堂の話では、鏡智流の槍は堅物をつく。それで柄が中ふくらみになつてゐる。それでないと堅物は穿でない。柱の中ふくらみは視覺的意味のものかと思つてゐたが、これで見ると、力學的の意味があるらしい。このことをまだはつきりと書いたものを見ない。

○

珍本。矢本某[正二]の「巴里通信」と云ふのは實に面白い。「コンコルドのまん中の一本の巨大なアラベスク」と云ふ調子である。「カトリックのピューリタン」と云ふのも出る。マリーアントワネットがルイ十六世の情婦だつたり妾（めかけ）だつたり、時には皇后だつたりする。著者は永く巴里に滞在して、フランス史を専攻した人だと云ふ。

○

「佛造眞朱」。萬葉集卷十六の「ほとけ造

るまそほ」の佛を、字義通りの「佛像」の意以外に解しようとした者は曾てない。私はこの「佛」は土器の「ほとき」でも通じると思ふ。一度これを検討した上での佛像説ならば賛成だ。

○

琉球の地名。琉球の古名は「掖玖 (Iaku)」であり、これから「琉球」の音に轉じたと云ふ。吉田東伍博士の説は恐らく正しい。掖玖は今屋久島の名に残つてゐる。ところで琉球三十六島と云はれるが、そのうち十島までが、やはり「I」音で始まる名を持つてゐる。伊計、伊江、伊平屋、與論、永良部、與呂、伊計間、伊良部、八重山 (Iēma)、與那國である。三十六島内の各個の島名には、なほ、石垣、西表 (イリオモテ)、屋我地などがあり、島内の地名にも、イ音で始まるものが夥しくある。これは琉球地名の一つの特徴だと云つていゝ。建久八年の古文書に薩摩の二十四姓が連署されてゐる中の八姓までが、やはり I で始まつてゐる。穎娃 (Ieno)、伊佐 (イサ)、江田、指宿 (イブスキ)、市來、伊集院、和泉、山門である。これらはみんな地名にも残つてゐる。また地名にはほかに納薩 (イリサ)、蘭牟田、などがある。イ音の地名族名は薩南でもまた一つの特徴だと云へる。ところが臺灣の紅頭嶼の部族名は、例外なくイ音で始まつてゐる。イヤユ、イワタス、イラタイ、イマウルツル、イラヌミルク、イワギヌ、イラライである。紅頭嶼土人と深い關聯のある呂宋島北部の番族もこれが多い。イゴロット、イヴ [ヴァ] タン、イタロン、イテタパン、イフガオ、イラヤ、イロカノ、イロンゴット、インフィエル、イバナグ等々枚擧にいとまなしである。南海地名、族名の、これらの

關聯は、私には偶然とは思へない。

八重山 (Iēma)、與那國 である。三十六島内の各個の島名には、なほ、石垣、西表、屋我地などがあり、島内の地名にも、イ音で始まるものが夥しくある。これは琉球地名の一つの特徴だと云つていゝ。建久八年の古文書に薩摩の二十四姓が連署されてゐる中の八姓までが、やはり I で始まつてゐる。穎娃 (Ieno)、伊佐 (イサ)、江田、指宿 (イブスキ)、市來、伊集院、和泉、山門である。これらはみんな地名にも残つてゐる。また地名にはほかに納薩 (イリサ)、蘭牟田、などがある。イ音の地名族名は薩南でもまた一つの特徴だと云へる。ところが臺灣の紅頭嶼の部族名は、例外なくイ音で始まつてゐる。イヤユ、イワタス、イラタイ、イマウルツル、イラヌミルク、イワギヌ、イラライである。紅頭嶼土人と深い關聯のある呂宋島北部の番族もこれが多い。イゴロット、イヴ [ヴァ] タン、イタロン、イテタパン、イフガオ、イラヤ、イロカノ、イロンゴット、インフィエル、イバナグ等々枚擧にいとまなしである。南海地名、族名の、これらの

金関丈夫筆「落穂集」原稿

○

「薔薇」。「さうび」と訓んで、源氏物語 (少女) や榮華物語 (卷十八) に出て來るのは、日本での古い用例であるが、繪に表はされたものは、明治以前には殆んどない。ただ一つ春日權現驗記の繪卷の中に、庭の植木の一つとして描かれたものを見た。最古にして唯一の例である。

○

「宇麻良」。私の國ではすべての棘 (トゲ) を「バラ」と云ふ。平安朝初期の寫本の華嚴音義には「棘」の字を「宇麻良」と訓んでゐる。これは後の「うばら」「いばら」で

あらう。但し「うばら」「いばら」は後には棘のある植物そのものゝ名となり、「ばら」に至つてはその花の名となつて「バラ色」などゝ云はれるやうになつた。

○

「蚊」。同じ本に蚊のことを「加安」と訓んでゐる。京都人はいまでも火を「ひい」、巳を「みい」、手を「てえ」と云ふ。蚊を「かあ」と云ふのも今も同様である。

○

「裴服」。尾崎秀眞翁の有名な説に古語の「裴然成章」の「裴」は、臺灣蕃人の衣紋から來てゐる。「非」はその紋様であると云ふ。道行般若經第六卷に「裴服」とあるから、とにかく服飾に關係あるものだと云ふことまでは承認出来る。

○

宗達の繪。いつか日当たりのいゝ塀の面に、蔦の影がうつ〔ゝ〕てゐるのを見て、これは宗達だな、と思つたことがある。古人もそれを感じたと見え、「槐記」を讀んでゐると、「宗達が畫は影法師をうつし」云々の文句があつた。

○

「彈呵」。「たんかをきる」と云ふ言葉がある。日蓮上人の遺文の中にしばしば「彈呵（タンカ）」すると云ふ言葉が出る。論敵を弾いて一呵することだから、正に江戸つ子の「たんか」に違ひない。東國人は鎌倉時代から盛んにたんかをきつたものと見える。

○

「服用」。藥をのむことを服藥とか服用とか云ふ。煙草を一服などゝも云ふ。今では服することは口を通（とほ）してからだに入れることだと思つてゐるが、服と云ふもじはからだの外につけることである。先年海南島の

ど人が腹痛の際、藥草を腹や背につけて、紐でとめてゐるのを見て、なるほどこれがほんとの服藥だとさつた。山海經などを見ると、之れを食すれば何々を治す。これを服せば何々を治すと云ふ風に使ひわけてゐる。眞の服用は、皮膚から藥が吸収される效を狙つたもので、現今でもいろいろの軟膏などがこの方法で用ゐられてゐる。

○

「上野國、下野國」。もとは「毛野國」或は「毛國」であつたが、私の考へでは「毛」には意味はなく、「介（ケ）乃國」でよかつたのだと思ふ。日本音の「ケ」には、「氣」「計」「慶」「義〔莪カ〕」の如き音字で表はされるものと、「介」字で表はされるものと二音あつたらしい。「介」が「ケ」と發音されるのは、いまでも東國で「さうかい」を「さうけえ」、厄介（やつかい）を「やつけえ」などゝ云つてゐるのと同様の過程による變化であらう。私は「毛の國」はもと「介の國」の如くに發音されたのであり、これは今の「甲斐」の國と同様であつたと思ふ。「カイ」は「蝦夷（カイ）」と呼ばれたアイヌの自稱である。後世の「毛人（けびと）」なども彼等が毛深い人種であるところから來たのではなくて「カイ人」からの轉訛であらう。この考へを發表した人はまだないやうである。

○

「亡徵」。韓非子の「亡徵」の中に次の句がある。亡徵と云ふのは國の亡びるしるしと云ふ意味である。

「國小而不處卑、力少而不畏強、無禮而侮大鄰、貪愎而拙交者 可亡也。」

國が小さいくせにへりくだることを知らない。力がたりないのに強國を畏れない。無禮

にして隣りの大國をあなどる。欲深くして外交が拙い。かう云ふ國は必ず亡びる。と云ふのである。

○

「赤章蔓枝」。同じ韓非子の「説林、下」に「知伯伐仇由」の一節がある。この一節は、イリアスのトロヤの木馬と同じ説話であり、トロヤの神官ラオコーンに當る人物の名を「赤章蔓枝」とある。赤章蔓枝を韓非子の時に何と發音したかは知る由もないが、どうも外來音の漢翻らしい。トロヤの遺蹟から東方の玉器が發掘されたと云ふから、古く希臘説話が東に遷つたことも考へられないことではない。

○

「玉の浦」。志賀直哉の「闇夜行路」の尾道の章に玉の浦千光寺の傳説がある。往昔繁昌した港が外國人に光珠を買ひとられて以來衰微したと云ふ話である。これは海南島にもあるし、臺灣にも一、二ある。「外人珠を持ち去り、土地の凋落する話」とでもなづくべき一聯の説話である。備中の玉島、紀伊の玉津島、なども類話があつたかも知れない、

○

大蝦。廣州の博物院に化物（ばけもの）のやうな大蝦（えび）の標本があつた。同地では昔から知られてゐたと見え、宋の樂史の撰んだ太平寰宇記の卷一五七嶺南道の一に膝修なるものが廣州の刺史たりし時「蝦魚鬚長四丈四尺」のものを得たと記されてゐる。

○

「如拙」。東寧書局の店頭で朝鮮畫の畫集を見てゐたら、中の人物の顔に皆見覚えがある。如拙の瓢鮎圖の顔だ。如拙、周文が朝鮮畫の系統だと云ふことは讀んだことはあつたが、自分できづいたのはその時だつた。

○

オナニー文學。畏友故岡田希雄君に「オナニー語誌攻（雑誌ドルメン）」がある。追加例を見つけたから補遺する。

・醒睡笑卷五、「おもひきやしべ（ペニス）の端書（はしがき）かきつめて、百夜（もよ）も同じ丸寝 [まろね] せんとは」

・二上り「月の八日」の替歌、「……先祖代々菩提のためより、こんないゝことしたこと無へ。そばご鬼めが氣を悪さうに、おめがた野暮だ。こなさんもやぼだ。おらあ蠟燭屋ときめる。ちやちやちやん。」蠟燭屋は勿論オナニーのことである。

・書名忘失、「あてがき」と云ふ題の笑語「峠（とうげ）」とかくべき字にあてがきで、「拵（手偏に上下）」と書いてある。拵は、手を上下することを指す造字で、「せんずり」と訓む。役人これを見て手偏は不埒、誰が書いた、名主か。いや名主は他行で。然らば年寄りか。年寄り病中。そんなら誰だ。はい五人組が書きました。と云ふ話である。五人組は同じくオナニーの隠語である。

・ついでに中國文學の一例を追加する。愈越 [俞樾] の「錢塘朱振甫」と云ふ小説に自瀆のことがある。事後「……聞硫磺氣…神識頓清。」とある。日本ならば栗の花の匂に譬ふべきを「硫磺の氣」とあるのが珍しい。（因に云ふ。先年蘇州土産に澤山の人が持ちかへつた寒山寺の「月落烏啼霜滿天」の石摺はこの愈越の書である。）

○

樹上看姪の話。「天保十年己亥二月之吉獻菴陳人撰」の序ある「烏有此譚」といふ寫本に「種樹丁登木（うえきや木にのぼる）。主人與妾坐堂而觀之（あるじとめかけぎしきでみてゐる）、丁俯視曰（うえきやしたを見

て)、卿奚爲白晝姪(どうしてまつびるまからそんなことをなさる)。主人曰否(そんなことはない)、我與妾別席(はなれてゐるじやないか)。丁曰 卿勿欺(うそおつしやい)、果如所説(そんなら)、我坐堂卿揚樹(わたしがざしきにゐますからあなたきにのぼりなさい)。從之(そのとほりにする)。丁上堂姪妾(うえきやはざしきでいいことをする)。主人曰奇々怪々(あるじ ふしぎふしぎ)、我在杪頭視(きのうへでみると)、卽無異汝之所視(おまへのみたのとちつともかはらん)。」

この話は勿論デカメロンにあるものと同様だ。天保のころはもうこの話が日本にも知られてゐたのであらう。

○

「せんと」。京都人はしきりに「せんど」と云ふ言葉を使ふ。「せんど人(しと)に云はしといて殺生な」と云ふ風に。「一所懸命(けんめいに)」とか「せつせと」とか云ふやうな意味で使ふ。この言葉が醒睡笑(巻一 その他)に出る。引用省略。して見ると京都では江戸初期から使はれてゐたのだ。

○

「紡錘車」。糸をつむぐ原始的器具に「紡錘車」と名づけられるものがある。石や土器で丸い平板或は珠をつくり、棒をさしこんで、ぐるぐるとまはし、その棒に振られた糸を巻くのである。これが世界各地の石器時代の遺蹟から出る。臺灣の遺蹟からも出る。これと同じ方法で糸をつむいでゐる圖が石山寺縁起の中に描かれてゐる。日本では鎌倉初期の頃まではこの原始手法が残つてゐたわけだ。臺灣ではタイヤル(霧社)が今でも同じものを使つてゐる。孔のあるスレートの丸石 これをスールン 或はスールリと云

ふ。これにさし込む棒をトゥヤダン、全軀をムートウヤと云ふ。形はこん[な]風になり、石山寺縁起のものと全く同様である。

○

「博士の家に女子(めのこ)の多き」、ことを枕草子の作者は「すさまじきもの」のうち数へてゐる。清少納言の直感ではたゞ「子の多き」ではなく、「女の子の多き」でなければならなかつたのを、面白いと思ふ。貧乏人の家に、女子が多くてはなるほどすさまじく見えるに違ひないが、一たいつゞけて女の子が澤山出来ると云ふことは、或る生物學的の理由により、聖賢の語を常に口にしてゐる學者先生が、案外精力の強いことを意味するやうだ。戦争などで精力の強い男が少くなると、こんど生まれる子供は男の方が多くなる。人間社會はかうして、いつでも男女の數が大略半々を保つものである。

後記

以上三十六題、落穂を拾ふの急なる餘り、文章を推敲する暇もなければ、疎開後今に至るまで不秩序になつてゐる藏書をひき出して一々出典をたしかめる面倒もとらなかつたので、甚だ粗雑、無味のものになつた。讀者之を諒せられよ。

(あんけいゆうじ・あんけいたかこ)

<http://ankei.jp>

メール a@ankei.jp